



Title	金嬉老事件と戦後日本の知識人：福田恒存の立場を手がかりとして
Author(s)	崔, 珉誠
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

金嬉老事件と戦後日本の知識人

—福田恒存の立場を手がかりとして—

現代日本学 博士前期課程 1 年

崔 珉誠

はじめに

みなさんは、金嬉老事件をご存知だろうか。

1968 年 2 月 20 日、在日朝鮮人の金嬉老（1928～2010）は静岡県清水市の「みんくす」というキャバレーで二人の暴力団員をライフルで射殺し、寸又峡温泉地にある「ふじみや旅館」に立てこもった。金嬉老は、この旅館の経営者、宿泊者合わせて 13 人を人質に取り、警察と対峙しながら 24 日まで籠城することになる。籠城していた 5 日間の間、金嬉老はニュース、ラジオ、新聞などを積極的に利用し、自分が在日朝鮮人として受けた差別行為、被害を訴えたことから、日本初の劇場型犯罪事件としても知られている。

この金嬉老事件をめぐるのは、当時多くの知識人が発言し、彼を民族差別の被害者と捉え、彼の犯行と後の法廷陳述は、日本社会に存在する差別を告発する行為であると位置づけた。しかし、現時点から顧みると、当時の知識人における金嬉老事件の受け止め方は、一方に偏っていたように感じられる。本発表の課題は、当時の知識人の受け止め方を紹介しつつ、その受け止め方は妥当であったのか、そしてその受け止め方を現時点において踏襲するのは適切なのかを、考えることである。

その際に手がかりとするのは、当時、保守派の知識人として知られていた劇作家福田恒存（1912～1994）である。福田は、この事件に対する知識人たちの反応を批判的に捉え、戯曲「解ってたまるか！」を書き下ろし、早くも 6 月（3～29 日）には、劇団四季により日生劇場において上演している。本発表では、まず、左翼系の知識人がこの事件と関わってどのような発言や行動をしたかを具体的に見たうえで、これに対して批判的であった福田の立場を参照しつつ、考察していく。「解ってたまるか！」から窺える、左翼系の知識人に対する福田の諷刺は、事件発生から 60 年が経とうとしている現在、この事件を歴史化し位置づけなおすうえで、もう一つの重要な視座であると考えられる。

1. 知識人たちは金嬉老事件をどう受け止めたか

知識人たちは、金嬉老が籠城を始めるとすぐに、発言と行動を始めた。知識人の発言と行動は、当時毎日新聞の一面を飾ったこの事件に関する記事を追っていくことでも確認できるが、この事件と積極的に関わった知識人の一人である鈴木道彦の著書『越境の

時 一九六〇年代と在日』(集英社新書, 2007 年)には当時の知識人の行動が時系列に沿って詳細に記録されている。知識人たちは、この事件へ対応を議論するために、事件発生から 2 日後の 2 月 22 日の深夜には、銀座の東急ホテルにすでに集まっていた。この会合には、後日東京外国語大学の学長を勤める中嶋嶺雄、フランス文学者であり一橋大学で教鞭を執っていた鈴木道彦氏らを含む複数の知識人が集まっていた。

知識人たちは、23 日の未明、金嬉老へ「よびかけ」を行う。よびかけの中で、この事件は日本人による民族差別を告発するものであるという金嬉老の主張を受け入れつつ、彼が自決せずに籠城をやめて法廷に立つことを説得している。さらに、もし金嬉老が籠城をやめて法廷に立ったら、弁護を支援することと、差別を許してきた日本民族の責任を明らかにして行くことを約束している。知識人たちにとって、金嬉老事件は単なる殺人事件ではなかった。金嬉老事件の背景を徹底的に調べることで、日本社会における在日朝鮮人差別の実情を明らかにし、一人でも多くの人に知らせ、日本における民族差別問題への責任を問い、反省を促そうとした。

2. 金嬉老公判対策委員会の活動

このことは、鈴木道彦、梶村秀樹らがメンバーであった「金嬉老公判対策委員会」(以下、委員会)の活動からもよく分かる。委員会は 1968 年 4 月 12 日に発足の声明が発表されて以来、戒能通孝が団長を勤めている弁護団と密接に協力しながら、1976 年 10 月まで約 8 年半の間様々な活動を行っていく。金嬉老事件の裁判は、1968 年 6 月から始まり、1972 年 6 月に静岡地方裁判所で第一審判決(無期懲役)、1974 年 6 月の東京高等裁判所での訴訟審判決(無期懲役)、最高裁判所が上告を棄却し、1975 年 11 月に刑が確定するまで 7 年を超える長い間続くことになるが、弁護団冒頭陳述、第一審最終弁論、控訴趣意書、控訴審最終弁論、上告趣意書など裁判に用いられた多くの資料は委員会と弁護団との協力で作成されることとなる。

このように、裁判を支援するとともに、また、公判を傍聴し、公判後に報告会、集会を開いた。東京と静岡で開かれた報告会、集会には多くの一般の参加者が集まり、この事件と裁判の内容に関して議論し、意見を交換した。著作活動も活発に行った。1968 年 6 月から、1976 年 10 月まで不定期に刊行された雑誌『金嬉老公判対策委員会ニュース』をはじめ、裁判における金嬉老の意見陳述、弁護人の意見陳述、検察官の冒頭陳述、証言集、控訴趣意書、判決文など裁判の中で行われた金嬉老本人、弁護団、証人、検察、裁判官による全ての発言が記録されている計 12 冊の『金嬉老問題資料集』が発行されている。

これらの資料は裁判の成り行きはもちろん、金嬉老の成長環境と事件の背景、弁護団、検察両側の主張、裁判官の判決、そして委員会がこの事件をどう捉えていたかまで正確かつ詳細に把握することができる貴重な資料であり、金嬉老事件研究の根幹となっている。また、駅前で資料やビラを配ったりもした。以上のような知識人たちによる委員会

の活動は、1975年11月に無期懲役の刑が確定したこと、また、鈴木道彦氏も指摘しているように、委員会の活動以降在日朝鮮人差別問題が必ずしも改善したとは言えないこと、在日朝鮮人の間には金嬉老の犯行に批判的な意見を持っていた人たちもいたが、それに対する言及は少ないことなど、現時点からみると限界もあった。しかし、日本社会に存在していた民族差別問題を広く知らせ、日本民族の責任を明らかにしようと努力したこと、単なる「ライフル魔による殺人事件」として記憶され、そして忘れ去られかねなかった事件を歴史的出来事として捉え詳細な記録を残し、以上で述べてきた様々な活動において尽力したことは啓蒙と学問両方において高く評価されるべきと考えられる。

3. 福田恒存の批判から見えるもの

以上が金嬉老事件と関わる知識人たちの行動の流れになるが、しかし、知識人の中には彼らの活動を批判的に捉えていた人もいた。特に、知識人たちは、事件発生2日後の22日に集まり23日には金嬉老へよびかけを行っているが、説得の目的があったとはいえ、事件直後の、まだ事実関係も明らかにされていない時点において、現場ではライフルとダイナマイトを持った犯人が警察と対峙している状況の中で、犯人に共感を示しているように受け取られかねない知識人の行動は、軽率であるという指摘が出てくる。福田恒存の「解ってたまるか!」も、その一つである。福田は、戯曲「解ってたまるか!」のなかで、主人公「村木」に、知識人の行動を諷刺させている。主人公「村木」と、「村木」を投降するよう説得する知識人の一人「久田川」との間では、作中において、次のようなやりとりがなされている。

「(村木) ……人間は孤独な存在だよ、自分の事は他人に決して解るものではない……。 (久田川) 解る、その気持ちは解る、だから……。 (村木) 黙れ、原罪野郎、手前等に俺の気持ちが解ってたまるか……。 実際我慢ならないね、近頃は何かにつけて話合いだの対話だのと尤もらしい事を抜きやがって、(中略) 俺はその「解る」にレジスタンスしてけふまで生きて来たのだぞ! なぜ、解らないと言はないのだ、なぜ俺を怒鳴りつけないのだ。

…… (中略) (久田川) その気持ちも解る、だから……。」¹

確かに、福田の指摘のように、金嬉老が受けてきた差別を経験していない日本人である知識人たちが、それも事件の2日後に、彼がどういう差別を受けてきて、どのような感情と理由で事件に至ったのかを理解することは難しいことである。しかし、少なくとも知識人たちが、難しいかもしれないけれど、解ろうと努力したのもまた事実である。また、劇の中の設定は金嬉老事件と異なるところが多々あることも注目に値する。主人公「村木」は、東北地方の岩手県出身で、父親は三人を殺して死刑された者である。村木は前科者の息子として「殺しっ子」と呼ばれていたという設定である。また、暴力団

¹ 福田恒存 (1968) 『解ってたまるか! 億萬長者夫人』新潮社、p.114.

ではなく、酔っ払い運転をしていた二人を殺している。背景の設定も東京のアメリカ大使館近くの高級ホテルで実際の事件とは異なる。例えば、森秀男（1968）の先行研究では、在日朝鮮人ではなく、日本人の岩手出身者という設定が植民地支配から始まる在日朝鮮人問題の重みを無くしているという指摘があるが、設定と実際の事件との違いを手掛かりに、福田が金嬉老事件を、また在日朝鮮人問題についてどう考えていたかを推察することができる。

おわりに

以上、金嬉老事件と関わる知識人の行動とそれを批判的に捉えていた福田恒存の演劇「解ってたまるか！」について述べてきた。金嬉老事件は事件発生から60年が経とうとしており、特に韓国では2020年代に入ってから金嬉老事件を対象とする研究が活発になってきた。そして、その研究はほぼ全てが単に金嬉老を民族差別の被害者として捉え、日本社会に対する告発としてこの事件を捉えている。しかし、このような視座からの研究は委員会など知識人の立場を踏襲しているだけで、例えば、福田恒存のように金嬉老を差別問題の被害者として捉える知識人たちとは路線を異なりしていた知識人がいたこと、劇「解ってたまるか！」について分析することで、福田が、ひいては保守的知識人が金嬉老事件についてどう考えていたかということ、金嬉老と対峙していた警察側の立場を検討していないこと、金嬉老が1999年に仮釈放されて韓国に戻ってきてからも殺人未遂で逮捕されたことを分析対象に入れていない場合が多い。また、当時のメディアの反応、この事件に対する在日朝鮮人、韓国人の評価なども注目されなければならない。特に、全ての在日朝鮮人が金嬉老に賛同していなかったことは、すでに指摘されている。金嬉老事件を単に差別の被害者による告発として捉えることは容易いことであるが、60年前の知識人の立場をそのまま踏襲するばかりではなく、金嬉老事件の歴史化のために、様々な視座からの研究と議論が求められている。

参考文献

- 金嬉老公判対策委員会『金嬉老の法廷陳述』三一書房、1970年
金嬉老公判対策委員会『金嬉老問題資料集成 下巻』むくげ舎、1982年
金嬉老公判対策委員会『金嬉老問題資料集成 上巻』むくげ舎、1982年
鈴木道彦『越境の時 一九六〇年代と在日』集英社、2007年
高松敬治「金嬉老と闘った五日間」『文藝春秋』第46巻第5号、文藝春秋、1968年
福田恒存『解ってたまるか！ 億萬長者夫人』新潮社、1968年
森秀男「笑ったあとに残るもの 四季・解ってたまるか！」『新劇評』第15巻第8号、白水社、1968年